

■e-黒板ニュース（第43号）：英国訪問報告（その3：Bett 2005の概要と雑感）

ロンドンから帰ってきました。雨の成田空港に到着しました。
 今回は、英国訪問報告（その3）です。「Bett 2005の概要」について報告します。
 また、SMART Technologies社（IWB英国シェア第一位）のNancy L. Knowlton社長、
 および、Promethean社（第二位）CEO Jury氏への「インタビュー印象記」、そして、
 今回の英国訪問に係わる「私の雑感」をお送りします。（関 幸一）

今号の目次：

- =====
1. 報告：Bett 2005の概要
 2. 二人の社長へのインタビュー印象記
 3. ロンドン訪問雑感
- =====

お友達への再配信またはご紹介は、ご自由にどうぞ。会員の皆様からの投稿もお待ちしています。
 宛先はいつでも ekokuban@cec.or.jp です。

e-黒板研究会のホームページ
<http://www.cec.or.jp/e2a/ekokuban>
 をご参照ください。e-黒板ニュースのバックナンバー等もご覧いただけます。

1. 報告：Bett 2005の概要

Bett Showは、英国最大のEducation technologyのイベントで、毎年開かれています。今年は、1月12日（木）～15日（土）の期間。場所は、Olinpia（ロンドンの西地区）です。

テーマは、” Take Hold of the Future”（未来をつかめ）。
 キャッチフレーズは、The future of education will be unveiled at BETT 2005
 – make sure you're there to see it!
 というのですから、「BETT 2005の会場で教育の未来がそのベールを脱ぐ」というような意味でしょうか。

出展者は、550社以上。英国教育大臣（DfES Secretary of State）のキーノート・スピーチで開幕しました。教育関連企業だけでなく、政府関係者や学校の先生方も多く参加しています。英国だけでなく、世界各国からも参加者が集まっています。BESA キーノート、Becta セミナ、企業セミナーなどICTに焦点を当てた産業界の専門家による100以上のセミナーやワークショップが開催されています。
 イベントの規模を例えていうと、「Eスクエア成果発表会の約10倍のイベント」ということになります。

「学校で働く人のためのチャンネル” Teachers' TV”」や12月に清水先生が米国の視察報告でご紹介されていたマウス型のアナライザー「ActiveVote」（無線で瞬時に生徒の回答を集計・分析できる機器）は、とて興味深いものでした。

2. 二人の社長へのインタビュー印象記

いくつかのセミナーの内容、インタビューで得られた新しい知見などの詳細は、別途、吉村さんに要点をまとめていただいて、皆様にも報告する機会があると思います。
 ここでは、SMART Technologies社社長Nancy L. Knowlton氏とPromethean社CEO Jury氏のインタビューで、私が聞き取れた両氏の意見とその印象を少し報告しておきます。

- (1) SMART Technologies社社長Nancy L. Knowlton氏
 Knowlton氏は、夫でありスマートボードの発明者でもある同社長のDavid Martin氏と共にビッグビジネスを成功させた辣腕経営者ですが、聡明で気配りの素晴らしい素敵な女性です。インタビュー冒頭の「どれくらいお時間をいただけますか？」という吉村さんの質問に対して、「今日はフリーです。私はどれだけでもOKです」と、信じられない回答が返ってきました。30分を目処にお時間をいただく予定でしたが、吉村さんの英語力と本質的な質問で、結局はで1時間を超えるインタビューとなりました。私のノートには以下のようなメモが残りました。
- ・ICTの効果とIWB（電子情報ボードの効果）を分離することはできない。それらは一体化しており、お互いに相乗効果を挙げていくものである。
 - ・電子情報ボードは、移動させて共用するのではなく、常設して使うべきである。
 - ・IWBのよさは、インタラクティブでビジュアルな教材を活用した授業ができることにある。
 - ・（次の段階は？との質問に対して：）先生同士の情報共有が重要になってくる。ベストプラクティスやよりよい授業を実現するためのアイデアや教材をシェアすることである。一人の先生だけで頑張るのは大変。
 - ・（グラフを描きながら）IWBの英国市場は、政府の政策と予算化により急激に立ち上がった。急カーブで導入が進んでいる。それに対して、米国では一次直線で

- 普及している。
- ・英国の悪い現象（実例）として、「お金はあるが、ビジョンがない」ということも起きている。先生が望む前にIWBが導入され、有効活用されないままの学校もでてきている。
 - ・日本で子どもたちが、友だちが目の前にいるのにそれぞれ別々にゲーム機で遊んでいる光景を見た。傍にいる友だちとコミュニケーションしていないのです。

(2) Promethean社CEO Jury氏

CEOのJury氏は、今注目のマウス型アナライザーを自社のIWBで使えるアプリケーションとして開発したり、先生方が自作の教材を共用できるサイトを立ち上げたりと戦略的なビジネスを展開している。

一見、シェア第1位のスマートボード追う猛烈経営者に見えるが、さすがと見る側面も垣間見ることができました。

「ビジネスを大きくするだけでは意味がない。これだけ頑張っている理由？それは、” Good Will” だ。」と。

Jury氏にも英国紳士の「カッコよさ」を見ました。

3. ロンドン訪問雑感

” Education, education and education” といったあのブレア首相の演説もカッコよかったと思いますが、Bett Show 2005の冒頭に、キーノート・スピーチをされた英国の教育大臣になったばかりというRuth Kelly氏も素敵でした。とにかく「カッコいい」ので、写真を何枚も撮りました。

ロンドンでお会いしたPromethean社のセールス・マネージャー Stephen Norris氏、そして、Avondale Park小学校のSue先生もとっても「カッコいい」のです。その「生き方」であったり、「言葉」や「立ち振る舞い」が。それらの人たちとの出会いが、私にとっては一番印象深い「ロンドン体験」でした。

英国でIWBのシェア第1位のSMART Technologies社社長 (President and Co-CEO) Nancy L. Knowlton氏には、約1時間の単独インタビュー (インタビュアー：吉村さん) ができました。また、シェア第2位のPromethean社CEO Jury氏にも約30分の単独インタビューができました。この期間にこのような機会に恵まれたことは、とても幸運でした。今年度の報告書に成果としてまとめ上げたいと考えています。

また、日本のボードメーカーとしては、日立ソフトさんが大きなブースを構え、英国の大手教材メーカーとの合弁会社により、教材コンテンツの充実をアピールしていました。このことはBESAのBarker部長も高く評価していました。

どの国にとっても「教育は重要」ということは明確です。英国はその重要性に対して国全体が「共通認識」を持ち、政府が方向性を示し、官民&教育界が連携して具体的な施策を立案し、毎年の成果評価をフィードバックしながら進めているように見えました。

英国もいろいろ問題点を内包しているのだと思います。しかし、授業見学をさせてもらった学校の子どもたちは、たしかに「学び」に取り組んでいました。特別に裕福な地区であったり、優秀な生徒がいる学校であったわけではありません。

「英国は、ここまで来るのに50年かかった」という人もいました。日本は戦後60年が経過しました。今、改革にとりかかっても、成果が形になるのは50年後かもしれません。でも、今、スタートしなければ何も変わらないのです。

少し時間が経ってから、英国での体験を振り返って思うことは、「日本で言う『教育』と、英国で言う” Education” は、少し違うのかな〜。」ということです。

昨年度の米国・カリフォルニア州訪問の時もそうだったのですが、英国で言う” Education” は、「難民」などの国語 (英語) を解さない人たちが大量に入ってきて、それらの子どもたちを「国民」としてどう教育していくかという国の課題があり、それに対して、「効率的に対処するためICT活用」という側面があるのではないかと思います。

日本はどうなのでしょう。課題は同一ではありませんが、「どういう国にしたいのか」そのために「どういう国民 (人) を育てたいのか」というビジョンと方法論が、まず必要なのではないのでしょうか。それは、国民である我々みんなが考え、方向性を見つけていくべき課題だと思います。

以上

=====
 編集・発行：財団法人コンピュータ教育開発センター 関 幸一
 e-黒板ニュース メールアドレス： ekokuban@cec.or.jp
 e-黒板研究会 ホームページ： <http://www.cec.or.jp/e2a/ekokuban/>
 =====